

- 冬の民俗文化財特集 P1~2
- いわたのこんなお話 P3
- 見付の店舗で
見性寺遺跡出土遺物を展示します! P4
- コラム『国分寺の火災から1200年』安藤寛 P4

磐田市教育委員会教育部文化財課 令和元年12月1日発行

冬の民俗文化財特集



大めし祭り



中野白山神社十日祭(お箱)



八王子神社米とぎまつり



氏神様の年始回り

1月には市指定文化財の民俗行事が各地でおこなわれます。今月号の特集では、それらの民俗文化財を一挙にご紹介します。

大めし祭り 令和2年1月5日(日)開催 磐田市富里419(諏訪神社)

平成8年に旧豊田町の文化財に指定され、合併後も引き続き指定されている「大めし祭り」は、毎年1月第1日曜日におこなわれています。

諏訪神社の祭礼、法要、直会後に新しく地区に嫁いできた初嫁をもてなす儀式をおこないます。初嫁のお膳にはご飯を高く盛り上げた椀と大根、人参などで作った陰陽物(男女のシンボル)の入った煮物がのせられています。初嫁を地区の一員として迎えると共に、子孫繁栄、家内安全、五穀豊穰を祈念する民俗行事です。



初嫁のために用意されたお膳

八王子神社米とぎまつり

令和2年1月12日(日)開催
磐田市下太 1-1 (八王子神社)



今ノ浦川で米をとぐ下帯姿の男衆

昭和55年に旧福田町の指定民俗文化財となり、合併後も指定されている米とぎまつりは、八王子神社の祭礼で、元禄年間(1688~1704)に疫病が周辺の村々に蔓延した際に、その疫病除を願って始められたと言われています。

当日朝10時頃より、地域の男衆が当番の家に集まり、御神酒をいただいたあと、下帯一つとなります。12時頃、宮司を先頭に、釜に入れた米、ざる、まんぱち(釜にのせて使う蒸し器)を持ち今ノ浦川に入り、米をとぎます。といだ米は、ふかしてオコワ飯にし、御供物として参拝者に分けられます。

八王子神社米とぎまつりの映像(ダイジェスト版約4分)をご覧ください。
右QRコードまたは市ホームページで『米とぎまつり』で検索してください。



中野白山神社十日祭(お箱)

令和2年1月12日(日)開催
磐田市豊浜中野 743 (中野白山神社)

およそ500年以上の昔から受け継がれている、地区内の安全、五穀豊穰、家内安全を願っておこなうお祭りで、昭和56年に旧福田町の指定民俗文化財になり、その後磐田市でも指定されました。

禊をした3人の盛松(結婚前の青年)が、羽織袴を身にまとい、お箱といわれる十六善神画像(県指定文化財)と大般若経文、厄難除け牛王宝印の入った3つの箱をそれぞれ捧げ持ち、13時頃地区内を廻ります。廻る先々では、一人一人の頭の上にお箱をかかげます。



箱を頭上にかかげる盛松

氏神様の年始回り

令和2年1月13日(月)開催 磐田市豊浜 3103 (三嶋神社)



案内人と共に神社をでる禰宜

氏神様の年始回りは、平成11年に旧福田町の指定民俗文化財となり、合併後も引き続き指定されています。

当日は早朝より、その年の当番組の中から選ばれた禰宜が、案内人と共に自治会内の各家を訪問します。禰宜は礼服に白いマスクという出で立ちで、氏神様の御神体を目よりも高く捧げ持ち、8時頃三嶋神社を出発し、一度通った道を二度と通らぬよう地区内を廻ります。この間、禰宜は決して口を利いてはいけないことになっています。

訪問を受ける家は、縁側に御神酒を供えてお迎えし、一年の家内安全を祈りました。現在は、自治会内の戸数も増えたため、班長宅に班の人たちが集まり神様をお迎えしています。

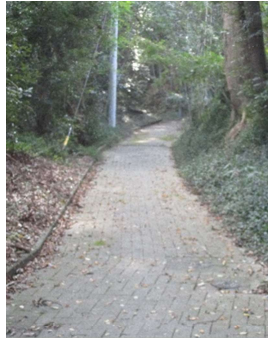
七つ道

磐田原台地東縁部の三ヶ野に、“七つ道”とよばれる、江戸時代以前の古い道筋から近代的な道路までさまざまな時代の道がある場所をご存知でしょうか。

今回は“七つ道”を紹介します。

第一の道・江戸時代以前の古道

七つ道の中で最も古い道筋であると伝わる江戸時代以前の古道は、鎌倉の道とも言われています。急斜面を這うように蛇行しています。現在でも歩いて通ることが可能です。



第二の道・江戸の道

旧東海道の一部である江戸の道は、大日堂の西側を南北に通る道です。長さは江戸時代以前の道と比べ半分ほどの距離ですが、坂の傾斜がきつい道です。

左：江戸時代以前の道 右：江戸の道

第三の道・明治の道

旅人の増加と荷物の移動が多くなったことから、明治17年に「緑のトンネル」と呼ばれている坂道が切り開かれました。この坂は大八車で荷をあげるのは大変だったため、牛屋といわれる店ができ、牛で荷物を運んだと言われています。

明治の道

第四の道・大正の道

大正6年には、それまでの3つの道よりもなだらかな大正の道が出来ました。それにより、人力による荷車の往来も容易になったため、人々に歓迎され経済交流に大いに貢献したと伝わっています。



大正の道

第五の道・昭和の道

昭和の道は、昭和30年に開通した国道1号線（現県道413号線）を指します。

交通量の増加にともない磐田バイパスが計画され、昭和56年に開通、平成2年に国道1号線と（現県道413号線）磐田バイパスの立体交差が完成し、磐田バイパスは七つ道のうちの「平成の道」と呼ばれるようになりました。

第六の道・質道

東海道の裏道で、質に売られる品物を人知れず見付へと運んだことから質道と呼ばれたと伝えられています。石碑が建てられていますが、現在、通ることは出来ません。



奥：平成の道 手前：昭和の道



質道の石碑



けんしょうじ 見付の店舗で見性寺遺跡出土遺物を展示します！

店舗開発のため、今年3月まで発掘調査をおこなっていた見性寺遺跡。このたび、完成した店内でこれまでの見性寺遺跡で出土した遺物を展示することとなりました。店内では、昭和40年代の調査で見つかった遺物を中心に縄文土器や弥生土器、古墳時代の土師器、平安時代の灰釉陶器をご覧ください。



展示の様子(奥の棚にも土器を展示しています)

場所 ダイハツ磐田見付店 磐田市見付 2898-1
 日時 令和元年12月7日(土)から当面の間
 9時30分から18時30分まで
 (定休日火曜日
 12月27日～1月3日休み)



展示に関するお問い合わせ

©磐田市

磐田市教育委員会文化財課 0538-32-9699

職員リレー コラム

国分寺の火災から1200年

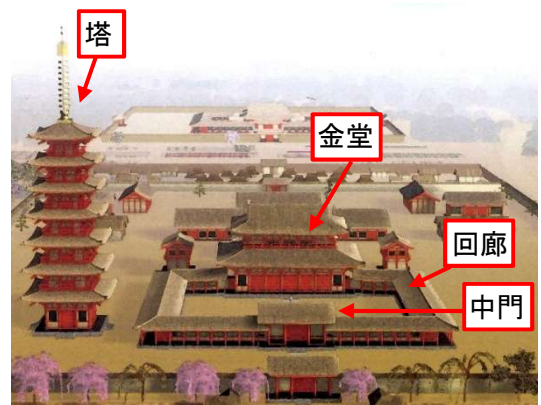
安藤 寛

10月31日の首里城焼失のニュースに驚かれた方も多かったと思います。沖縄のシンボルがわずか数時間で灰になり、とても残念に思います。

遠江国分寺跡も平安時代の弘仁10年(819)に火災があったことが文献に書かれています。今年はその火災から1200年にあたります。

発掘調査では、多量の焼土や炭化した部材などが出土し、塔や金堂・回廊が火災にあったことがわかりました。一方で、講堂や僧房(僧の寄宿舎)などでは火災の様子は見られず、国分寺はこれらの建物を使って平安時代の半ば過ぎまで存続したようです。

他方、火災にあった結果、様々なものが後世に残りました。遠江国分寺の最大の特徴は、基壇(土台部分)の周囲を木の板や柱で囲んだ木装基壇ですが、その部材が炭で見つかったことから、木の種類(主にヒノキ)や木材の加工方法がわかりました。また年代測定も行い、記録と矛盾しないこともわかりました。塔からは塔本塑像という小さな仏像が見つかりました。塑像は粘土製で、焼成しないため、水などによって分解されていますが、火災にあった結果焼き物になって残り、塔が仏像群で飾られていたことを示す貴重な証拠となりました。



CGで復元した遠江国分寺

赤矢印で示した建物が火災にあった。金堂の北側に講堂、僧房があった。



金堂跡西縁の木装基壇



塔本塑像(高さ7.9cm)

編集後記 2P目に米とぎまつりの動画をご覧ください。動画サイトでは大念仏等の民俗文化財もご視聴出来ます。あわせてお楽しみ下さい。

発行：磐田市教育委員会事務局教育部
 文化財課(磐田市埋蔵文化財センター)
 住所：〒438-0086 磐田市見付 3678-1
 電話：0538-32-9699

◆WEB版は市HPから閲覧できます。磐田市文化財だより 検索

